《楽曲解説》

解説＝野本由紀夫

5/21　第94回東京オペラシティ定期シリーズ

本日の定期演奏会について

バッティストーニと東京フィルの定期演奏会といえば、2013年5月の「ローマ三部作」の鳥肌立つ大熱演が記憶に新しい。とりわけ『ローマの祭』は驚異的な演奏で、観客を興奮のるつぼに巻き込み、スタンディング・オベーションの嵐だった（このときの演奏はCD化され、会場のロビーでも手に入る）。

今月3回行われる定期演奏会も楽しみだ。うち2回はマエストロの故郷イタリアの巨匠、プッチーニの歌劇の演奏会形式での演奏である。残り1回が本日の、「イタリアン・シンフォニック・プログラム」である。

「イタリアはオペラばかりではありませんよ、オペラの巨匠たちは管弦楽曲もすばらしかったことを再認識してください」、というきわめて意欲的なプログラムである。比較的聴く機会の少ない作品をバッティストーニがどう料理するのか、期待で胸が躍る。しかも、曲の配列は作曲家の生まれた順。ほぼ一世代ずつ、約100年間に及ぶイタリア管弦楽曲の発展史を概観できるように組み立てられている。 バッティストーニ、恐るべし！ 今夜は至宝の一夜となるだろう。

アンドレア・バッティストーニ指揮
東京フィル『レスピーギ：ローマ三部作』

【『レコード芸術』2015年2月号「読者が選んだ 2014年ベスト・ディスク」第2位】
【第21回日本プロ音楽録音賞最優秀賞受賞】

「これほどの若さでこれほどの才能、というよりも既に卓越した指揮者との出会いは私的にははじめて！『ローマの松』はトスカニーニをも超えて史上最高ではないだろうか！」
「まさに驚天動地の新人登場。とても信じられないほどの名演奏である。それも日本のオケというのも泣けてくる。盤歴54年、こんなに嬉しいことがあるのでまだまだ人間やめられない。」

（『レコード芸術』2015年2月号より一部引用）

COGQ-68 ￥2,800+税
SACD Hybrid
[Stereo&5chサラウンド]
ライヴ録音（96kHz / 24bit）：
2013年5月31日、
サントリーホールにて

レスピーギ：
交響詩『ローマの祭』
01. I - チルチェンセス
02. II - 五十年祭
03. III - 十月祭
04. IV - 公現祭

レスピーギ：
交響詩『ローマの噴水』
05. I - 夜明けのジューリアの谷の噴水
06. II - 朝のトリトーネの噴水
07. III - 真昼のトレヴィの噴水
08. IV - 黄昏のメディチ荘の噴水

レスピーギ：
交響詩『ローマの松』
09. I - ボルゲーゼ荘の松
10. II - カタコンベ近くの松
11. III - ジャニコロの松
12. IV - アッピア街道の松

ロッシーニ (1792-1868)
歌劇『コリントの包囲』序曲

『コリントの包囲』は、イタリア・オペラの巨匠、ロッシーニが1823年に**パリ**に活動の拠点を移してから書いた、**2作目のオペラ**（初演1826）。言語もフランス語である。

もともとは1820年、ナポリで初演したイタリア語による自身のオペラ『マホメット2世』を改作したものである。同作品はイタリアではほとんど成功しなかったが、言語とともに**フランス・グランド・オペラの様式**にあわせて改作したことにより、パリで大成功を収めた。これを受け『コリントの包囲』は翌年イタリアに逆輸入されてイタリア語版も作られ、ヨーロッパ中で評判をとることとなった。

オペラの設定は、1459年、ギリシア本土の町コリント。いまやこの町は、マホメット2世の率いるトルコ軍を前に陥落寸前である。ところが、こともあろうにコリントの総督クレオメネの娘パミーラは、異教徒で敵官のマホメット2世を愛していたことが判明。

2人が結婚すればただちに和平が成り立つが、悩んだ末、パミーラは祖国ギリシアの人々とともに戦う道を選択する。結果、コリントは炎上して陥落し、パミーラは自ら命を絶つ。

ちょうど1821年から1829年にかけてのギリシア独立戦争の影響で、ヨーロッパではギリシアに同情的だったことも手伝って、この題材は大成功した。

序曲についてだが、もともとの『マホメット2世』に序曲は付いていなかった。したがって、序曲はフランス用に新たに作曲された。勇壮な出だし（序奏部）は、オペラ『ビアンカとファッリエーロ』序曲（1819）の序奏部の再利用である。そのあと、トロンボーンの厳かな響きと小太鼓を伴って、木管楽器で**ギリシア風の葬送行進曲**が奏でられる。ヴァイオリンが用いられず、ヴィオラから下の中低音の弦楽器が用いられているので、なおのこと渋い響きになっていよう。

はっきりと休符で区切られて、第1ヴァイオリンの**急速な動きで主部**が始まる。これは1820年作曲の『メッサ・ディ・グローリア（栄光のミサ曲）』のメロディだ。あわただしく強奏される**推移部**は、「ドーー↗ミ↘ソ↗ド↘ミ↗ソ↘｜ド」というギザギザ型のメロディのカノンでできている。

副主題は、弱音のなか、チェロだけが無窮動的に伴奏している部分がそう。メロディは「レ・↗ソッラ｜シドレ・」とはじまるが、むしろそのリズム・パターンのほうが用いられていく。展開部では、以上のメロディ素材があちこちに顔を出す。

最後の最後にもう一度、**序奏部が再現**され大きな盛り上がりのなか、序曲は閉じられる。

［楽器編成］ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チンバッソ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル）、弦楽5部

ヴェルディ (1813-1901)
歌劇『シチリア島の夕べの祈り』より舞曲

イタリア・オペラ界最大の巨匠ヴェルディが、パリのオペラ座のために作曲したのが『シチリア島の夕べの祈り』である（1855年6月13日初演）。台本はフランス語で、ヴェルディの19番目のオペラである（『椿姫』の次）。フランス風のグランド・オペラの様式にのっとっているため5幕からなり、バレエのシーンが多い。

シチリア島はイタリア南部（地図で言うと、ブーツのつま先の先にある島）にあるため、地中海の要衝として古くから取り合いになってきた島である。このオペラも、フランスの支配下にあった1282年に起こった、シチリア島の住民の武装蜂起をテーマにしている。いかにもイタリア民族主義的な時代ならではの題材といえよう。

今回演奏されるバレエ音楽「四季」は、第3幕第2場に総督部の大広間で繰り広げられる舞踏会の音楽である（30分弱）。これは、マイム（踊り手による劇中劇）の伴奏音楽と舞曲のメドレーからなるので、オペラの本筋のストーリーからは離れている。したがって、ここでは劇中劇の内容をふまえて解説していこう。

なお、日本の感覚からすると、四季は春から始まりそうなものだが、ローマ神話では一年の始まり（つまり1～３月）は「冬」である。だから第1曲は「冬」になっている。

第1曲　冬　金管楽器の勇壮なファンファーレにより、3分半ほどの**プレリュード**から始まる。台本上は、ここでヤヌス神が登場する。ヤヌス神は、ギリシア神話には出てこないローマ神話独自の神で、「出入り口と扉」の神である。前後に2つの顔を持ち、1年の終わりと始めの境界（年のまたぎ目）に位置するので、1月を司る神なのである。

音楽はいったん休符で区切られて、静かな和音だけの響きとなるが、ここではヤヌス神が大地を前に黄金の鍵を持ち、四季に命を与える。氷で覆われたカゴが立ち現れ、1年の最初の季節「冬」が若い女性の姿で登場する。彼女は毛皮に包まれており、その後ろには荷物を持った3人の若い娘もいる。

凍えるあまり歯がガチガチ鳴るかのような音楽（これぞイタリアの器楽の巨匠、ヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲『四季』の「冬」にも出てくる表現法！）によって、彼女たちが寒さに震える様子が描かれる。

長い休符のあとも台本ではマイムが続く。女性の1人が火打ち石でたたくと、火花が飛んで、火がつく（ヴァイオリンで音程を指でずり下げるグリッサンド奏法と、弦を指ではじくピッツィカート奏法の部分）。彼女たちは暖をとり、「冬」を近くに招く。彼女たちは、踊りの熱をかきたてる。

こうしてようやくバレエ音楽「冬」がはじまる。ここからは急速なテンポの**2拍子系の音楽**となり、ほぼ1分ずつ**3つの舞曲**が演奏される。音楽はどんどん加速して終わる。

第2曲　春　8分弱の音楽である。やはり最初はマイムの部分で、ハープとフルートが上行する分散和音を奏して、西風が氷のカゴの周りを吹きすさぶ様子を描く。西風は、熱で氷を解かそうとする。だんだんハープとフルートの動きが激しくなってくると、つえに花が咲く。そこから、若い女性の姿をした「春」

が生まれる。

続いて、かなり長い間（2分ほど）、**クラリネットのソロ**となる。小協奏曲といってよいほどだ。それが終わると、ようやく木管楽器を中心としたワルツ（ハ長調）となる。

休符をはさんで変イ長調のワルツとなる。そのあとヘ長調の急速な舞曲が続く。曲はそのままテンポが加速して、興奮のなか終わっていく。

第3曲　夏　4曲中、最も短く5分ほどの音楽。まず不穏な雰囲気を弦楽器が醸し出すと、**フルートのソロ**となる。ここもマイムであり、花が消えうせ、カゴがレースのような穂で再び覆われる。やはり若い女性の姿をした「夏」が、王冠の真ん中から生まれる。

「タータ　タータ」の牧歌風の伴奏に乗って、**オーボエのソロ**によるパストラーレ（田園劇風の音楽）が始まる。木管楽器群にメロディが移ったところは、「夏」と仲間たちが踊ろうとするが、とても暑いという箇所だ。再びオーボエ・ソロに回帰し、暑さがぶり返す。

それが終わると、ヴァイオリンと高音木管楽器による、軽快な3拍子の舞曲となる。若いニンフ（水の精）たちは、緑の長い絹のヴェールが付いたカゴから離れ、水を模倣する。「夏」は彼女たちの動きをまねして、泳ぐ。

フルートの下行分散和音による**ソロ**は、若い女性たちの水浴シーンだ。フルートと高音木管楽器群の掛け合いがひとしきり続くと、再びオーボエが短く登場。クラリネットとファゴットにリレーされると、そのまま途切れずに第4曲に入っていく。

第4曲　秋　4曲中、最も長く10分ほどの音楽。1人のニンフが、いたずらでほかのニンフたちを驚かせる（急速なクレッシェンドと和音強打）。すると牧神も驚く（牧神は、ヒツジと人間の合わさった半獣神）。彼女たちが立ち去ると、牧神はその後を追う。

フルートとクラリネットによる非常に早い**舞曲①**が弱音で始まる。牧神は、ニンフたちが遠くで楽しそうにしている音に聞き耳を立てる。例のカゴは、果物と命の薪（たきぎ）をまき散らす。牧神はカゴの周りをぐるぐる回り、ついにその上にのぼる。彼が命の薪を押し潰すと、女性の姿の「秋」とその仲間たちを見つける。その驚きが、オーケストラ全員の和音強奏の箇所だ。

再び舞曲①が始まる。やがて金管楽器も加えた華やかな音楽となる。それが一区切りつくと、**チェロ**が朗々とメロディを歌う**舞曲②**となる。それが終わると、**もう一度舞曲①**が再現される。

はっきりと区切られて、2拍子の**舞曲③**となるが、1分もしないで終わる。次にヴァイオリンとピッコロや高音木管楽器による、6/8拍子の**舞曲④**が始まる（やはり1分ほど）。フルートとクラリネットの細かい音符の動きが聴きどころだ。

金管群のファンファーレとともに、急速な2拍子の**舞曲⑤**が始まる。この舞曲の**中間部⑤'**はヴァイオリンとチェロをはじめとする朗々としたメロディだ（トライアングルが長く鳴らし続けられる）。**もう一度、舞曲⑤と中間部⑤'**が再現され、最後は輝かしく熱狂のるつぼのなかで舞踏会は締めくくられる。

［楽器編成］ピッコロ、フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チンバッソ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル）、ハープ、弦楽5部

プッチーニ (1858-1924)
交響的前奏曲 SC32

『交響的前奏曲』イ長調（プッチーニ作品目録番号SC32）は、のちに『蝶々夫人』や『トゥーランドット』など、数々の傑作オペラで名声を確立することになるプッチーニの、最初期のオーケストラ作品である。

1882年、**ミラノ音楽院の卒業作品**として作曲された。彼のオーケストラ作品としては、2作目にあたる。初演は同年7月15日に、同学院の学生オケによって同学院で行われた。

この曲を聴くとまだ「若いな」という印象をもたれるかもしれないが、曲の一部がのちの『妖精ヴィッリ』（プッチーニ最初のオペラ、1883／改訂1884）やオペラ『エドガール』（1889／改訂1892、1905）に転用されている点でも、注目すべき作品だろう。

そもそも劇的な曲作りや、とりわけメロディ作法そのものは、後年の大成ぶりをほうふつとさせる。それに、オーケストラ楽器の用い方やメロディの展開技法は、24歳にしては並外れている。

同じイタリアの巨匠ヴェルディ（1813-1901）の影響も聴き取れるが、**ワーグナー**（1813-1883）**の影響**も明らかだろう。とりわけ半音階的な和声法は、『ローエングリン』や『トリスタン』の響きをプッチーニが熟知していたことを示していよう。

『交響的前奏曲』は、「交響的」と題されているとおり、ソナタ形式をベースに組み立てられている。「前奏曲」と付けたのは、演奏時間がほぼ10分程度の小規模作品だからだろう。

曲は、導入部なしにいきなり木管楽器群による主要**主題**から始まる。リズムが「ター・タータ｜ターター」となっていることが特徴。音の高低や音程（跳躍のぐあい）はさまざまに変化していくが、リズムだけは変わらない。

このやり方は、じつは**ベートーヴェンが得意としたモチーフ操作方法**に他ならない。有名な『運命』交響曲の第1楽章にしても、メロディはさまざまに変化しても、「ジャジャジャジャーン」のリズムは楽章を通して一貫している。その意味で、プッチーニの最初期作品には、ドイツ的な作曲理念を聴き取ることができよう。

一方、**テンポがやや速くなった副主題は、三連符のリズム**が刻印されている（ハープがずっと伴奏している部分）。**展開部**（中間部分）**は、トランペットとトロンボーン**がファンファーレ的に強奏するところからだ。主要主題を、金管楽器群を中心として劇的に吹奏する。

曲が静まっていき、やがて再びハープが登場するところからが**再現部**。主要主題と副主題が一回ずつ顔を出してすぐ、ほぼ和音進行だけの**コーダ（結尾部）**となる。この部分にワーグナーの『ローエングリン』や『トリスタン』の残響を聴き取ることができるだろう。

曲は最弱音のなか、ピッツィカート（弦をはじく奏法）で終わってゆく。

［楽器編成］ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル）、ハープ、弦楽5部

レスピーギ (1879-1936)
組曲『シバの女王ベルキス』

ローマ三部作（「噴水」「松」「祭」）で有名な、イタリア器楽界の巨匠、レスピーギが作曲したバレエ音楽『シバの女王ベルキス』にもとづく組曲である。オーケストラの演奏会よりも、毎年の吹奏楽コンクールでよく取り上げられているので、ブラス版のほうがなじみ深いという方もいらっしゃるだろう。原曲のバレエは、レスピーギ最晩年の52歳（1931）で完成し、**彼の作品中、最大かつ最後のバレエ音楽**となった。作曲に際して、レスピーギはさまざまな資料を調べ、**中近東**（ヘブライやアッシリア）**の旋法（モード）に基づいて創作**したため、風変わりなメロディとハーモニーにあふれている。

物語は旧約聖書の「列王記」第10章がもとになっている。紀元前９～10世紀ごろ、シバ国（現在のイエメンからエチオピアのあたり）の女王ベルキスが、古代イスラエルのソロモン王を訪問する。その聡明さと気高さに感銘した女王ベルキスは、ソロモン王に大量の貢物を贈り、歓待されて長期滞在する。他方、ソロモン王もベルキスの美しさに感動し、二人は結婚することになる。その祝賀の大団円で幕となる。

バレエは1932年1月23日に、ミラノ・スカラ座で初演され、評判となった。しかし、なにしろバレエは全7幕からなり、上演に80分もかかる大曲だ。その上、合唱やバンダ（ステージとは別働隊の楽器群）だけでなく、あまりお目にかからない民族楽器に加え、独唱者やナレーターまで必要とする。これでは、おいそれと再演できないことは明らかだろう。そこでレスピーギは２つ組曲を作ることにした。しかし健康の悪化のために、1934年に組曲をひとつにまとめ上げるのが精いっぱいであった。

組曲は、全曲のなかから第2・３・５・７幕の音楽を、物語の時間軸どおりに4曲にまとめたものである。しかし、交響的な演奏効果を考えて、**第2曲と第3曲を入れ替えて演奏**する場合も多く、本日の演奏でも入れ替えて演奏される。

第1曲　ソロモン王の夢　バレエ原曲の第2幕「**ソロモン王の寝室**」**の音楽**で始まる。夢の中でまどろむソロモン王。フルートとクラリネットがアラビア風のメロディを静かに奏でる。オーケストラの全員合奏の部分は、第2幕の「**ソロモン王の入場**」**の音楽**。メトロノームのように規則正しく四分音符でビートを刻む。トランペットのメロディは、王の風格を表すかのようだ。

音楽がやがて静まると、王が書記官に**恋文を書かせる場面**となる。ハープ伴奏に乗せて、チェロ独奏が愛を語る。ここは、まるでリムスキー＝コルサコフの『シェエラザード』のヴァイオリン独奏のようだ。

つづくオーケストラ全員合奏は、第5幕の、ベルキスとソロモン王の**面会の場面**で、ベルキスが倒れる。オーボエ・ソロを経て、ハープやチェレスタ、グロッケンシュピール（鉄琴）のキラキラした音のなか、**行進曲風の音楽**が静かに流れ、2人の出会いが夢だったかのように音楽は遠ざかっていく。

第3曲　戦いの踊り　2分ほどの短い曲。まず競技選手や戦士が入場するかのような金管楽器の雄叫びの後、第7幕の「**太鼓の踊り**」が始まる。ソロモン王とベルキスの結婚を祝う余興の踊りで、半裸の若い競技選手たちが踊る。

一区切りつくと、今度は音に高低差のある**戦闘太鼓**が叩かれ、エス・クラリネット（E♭管クラリネット）が高らかに戦いのテーマを吹奏する。嵐のような急速なテンポとなり、第5幕の「**戦いの野蛮な踊り**」となる。ベルキスとともに到着したシバの人々の、槍をもった踊りで、「２＋２＋３」拍子が繰り返される。

曲はやがて「２＋２＋２＋３」拍子となって、熱狂的な掛け合いが演じられ、その頂点で突然一音を残して終わってしまう。

第2曲　夜明けのベルキスの舞い　原曲の第3幕「**シバの空中庭園**」**の音楽**である。ベルキスもまた、朝方まどろみのなかにいる。**ダラブッカ**（酒杯の形をしたアラビアの中型太鼓）のリズムに乗り、フルートが延々とエキゾチックなメロディを歌う。チェレスタの彩りも、夢の世界のようだ。

イングリッシュ・ホルンが登場したところからが、ベルキスの「**夜明けの舞い**」である。目を覚ました女王が薄いヴェールをまとい、裸足で妖艶に舞う。途中、タンブリンの道化風のリズムも聴こえてくる。

木管楽器だけでなく、チェロやヴァイオリンの独奏も聴きどころ。最後にもう一度、イングリッシュ・ホルンによるベルキスのテーマが再現されて、不思議な響きのなかで終わってゆく。

第4曲　饗宴の踊り　原曲の**フィナーレ**、すなわち第7幕「**饗宴の踊り**」がそのまま使われている。ソロモン王とベルキスの結婚を祝うとともに、イスラエルとシバの連合をも祝す音楽だ。

狂乱状態が一瞬静まり、バンダ（**舞台裏のトランペット**）が宗教的な恍惚感をもってメロディを歌う（バレエ原曲では、テノール歌手がヴォカリーズで朗々と歌う）。その後、打楽器の強打もあって、音楽は乱痴気騒ぎへと発展していく。金管楽器のファンファーレの後、第１曲　「ソロモン王の夢」の行進曲が全員合奏で**再現**され、**王の夢が実現**したことを示す。**バンダ**も加わって、大団円のなか幕を閉じる。

［**楽器編成**］ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、エス〔E♭〕・クラリネット、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル、アラビア太鼓、タンブリン、タムタム、ミリタリードラム、シロフォン、グロッケンシュピール、戦太鼓2）、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、弦楽5部
［**バンダ**］トランペット3

のもと・ゆきお（音楽学）／桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部芸術教育学科教授（音楽史、鑑賞理論、指揮法）。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」の元監修・解説者、同「ららら♪クラシック」のららら委員長、Eテレ学校番組「おんがくブラボー」番組委員。「題名のない音楽会」にも出演。